熊取町埋蔵文化財調査報告第31集

東円寺跡発掘調査概要報告書・X

（仮称）総合保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

1999・3

熊取町教育委員会

はしがき

近年、埋蔵文化財の新発見には注目するものがあります。奈良県の黒塚古墳で多量の鏡の発見、キトラ古墳では天体図が書かれた装飾古墳など、連日メディアを賑わせたのも記憶に新しいと思われます。また泉南地域において阪南市で縄文時代後期～末期の遺跡が発見され、泉南地域における当時代の研究に寄与するものと思われます。

熊取町には、現在40ヶ所の遺跡・埋蔵文化財包蔵地が知られています。埋蔵文化財という文化財は、その存在を発掘調査によって初めて知ることができます。私たちは、埋蔵文化財が壊される時には必ず発掘調査を行い、調査資料を後世に残していかなければなりません。いずれ私たちの今の生活も地面に刻まれて後世の発掘調査によって知られるようになるでしょう。

今回報告する東円寺跡は、熊取町役場一帯に広がる遺跡であり、町内の遺跡としては最も広い面積を有しています。これまでの調査で、東円寺は平安時代末頃には建立されたものと推定されており、熊取町役場一帯の小字名には寺院に関する名称が残されています。またその周辺は、鎌倉時代・室町時代を中心とする集落跡としてもわかってきており、大阪府教育委員会による昭和60年からの発掘調査に始まり、今日に至るまで少なからず成果が上がっています。

本書は、平成9年度の東円寺跡内における（仮称）総合保健福祉センター建設工事に伴う緊急発掘調査の成果を概要報告書にまとめたもので、泉州地域の歴史解明のための資料となり文化財保護活動の一端を担うことを念願して発刊するのであります。

最後になりましたが、文化財調査にあたって多大なるご協力とご理解をいただきました諸関係各位に厚くお礼を申し上げるとともに、文化財保護により一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成11年３月

熊取町教育委員会

教育長　甲田　太三郎

例　　言

一　本書は熊取町教育委員会が公共事業として平成９年度に実施した、東円寺跡97－4区・97－16区における発掘調査の概要報告書である。調査報告としては「東円寺跡発掘調査概要・Ⅸ」の続編にあたるものである。
　東円寺跡97－４区（仮称）総合保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
　東円寺跡97－16区　公用車車庫移設に伴う埋蔵文化財発掘調査

一　東円寺跡の略称は、ＴＯＥである。

一　調査の実施にあたっては、熊取町福祉総務課の協力を得た。

一　調査・整理の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関に御指導、御教示をいただいた。記して感謝の意を表わすものである。（敬称略）
　坪之内　徹（奈良女子大学）、玉谷　哲（熊取町史編纂委員）、平田洋司（大阪市文化財協会）
　谷口宗治（金沢市教育委員会）

一　現地で行った調査担当者は以下の通りである。
　前川　淳　、永井　仁　熊取町教育委員会文化課文化財係考古学技師

一　本書の作成においては、調査担当者と石松　直が行った。

一　本調査においては、山本恵子・関井澄子・村田岳哉・石松　直の参加があった。

凡　　例

一　遺構名については、記号を使わず文字標記を行っている。
　人間が手を加え、地形が少しずつ下がっている状態の遺構を「落ち込み」として、谷状自然地形とは区別している。また小さい穴を「ピット」、大きい穴については「土壙」としている。

一　土色は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」第10版（1990）を用い色別した。なお土色の記号であるHueは省略している。

一　遺物の実測については1／4を原則としている。なお、土器の断面図では、須恵器は黒つぶし、瓦器は斜線、黒色土器についてはトーン、土師器については白抜きとした。

一　97－４区については調査の便宜上、段状の高まり部分を南調査区、谷状の地形部分を北調査区と設定している。

一　本書における標高はＴ・Ｐ（東京湾平均潮位）を用いた。

一　本書で用いた器種名及び土器の年代については、『日置荘遺跡』「大阪文化財センター」（1995）『概説　中世の土器・陶磁器』「中世土器研究会」（1995）に従うものとする。

一　本調査に関する遺物、写真、実測図等は熊取町教育委員会発掘調査整理室において保存している。広く活用することを希望する。

東円寺跡発掘調査概要報告書・X目次

本　　文

はしがき

例言・凡例

目次　　本文・挿図・写真図版

第1章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第2章　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第3章　97－4区の調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第1節　調査区の地形と基本層序
第2節　検出した遺構
第3節　出土した遺構

第4章　東円寺跡97－16区の調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第5章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

東円寺跡出土の中世遺物について

報告書抄録

挿　　図

図1　熊取町の位置

図2　熊取周辺図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

図3　熊取町遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

図４　東円寺跡周辺小字図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

図５　東円寺跡97－4区試掘調査土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

図６　東円寺跡97－4区試掘調査位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

図７　東円寺跡97－4区壁面土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

図８　東円寺跡97－4区第1面・第2面遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

図９　東円寺跡97－4区第3面遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

図10　東円寺跡97－4区遺物実測図（その1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

図11　東円寺跡97－4区遺物実測図（その2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

図12　東円寺跡97－16区位置図・壁面土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

図 版 目 次

図版１　東円寺跡97－4区航空測量図

図版２　東円寺跡97－4区遺構配置図・断面図

図版３　東円寺跡97－4区壁面土層図

図版４　東円寺跡97－4区出土遺物

図版５　東円寺跡97－4区出土遺物

図版６　東円寺跡97－16区断面図・全景

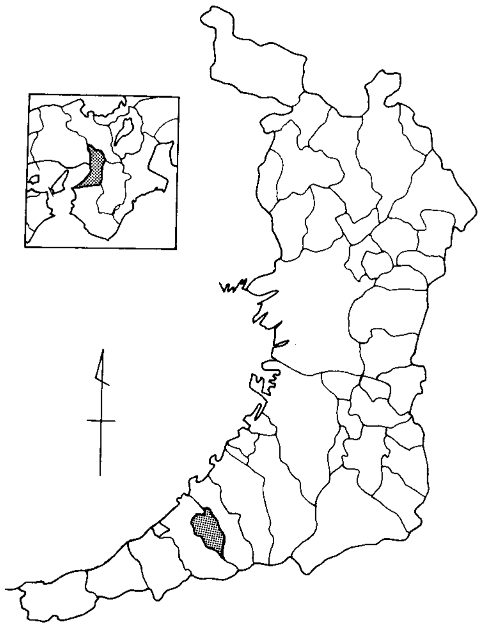


図1　熊取町の位置

第1章　位置と環境

地理的背景

熊取町は、大阪府の泉南地域、旧国名和泉国のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、他の三方を泉佐野市に囲まれた町である。町域は、東西約4.8km・南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈しており、約17平方kmの町面積を有している（図１）。地形についてみると、町南部は、泉州地域の基本山地である和泉山地が大部分を占め、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその端である段丘部が面積の大部分を占めている。面積比は41％、段丘23％、低地12％その他の比率となっており、山地、丘陵部分が総面積の約6割を占めている。

河川は、見出川・雨山川・住吉川・大井出川・和田川が南部の山間部一帯を水源として北部に向かって流れており、さらに泉佐野市域を流れて大阪湾に注ぐ（図２）。

東円寺跡は、大井出川が和田川と合流し、住吉川となる付近一帯に形成されている低位段丘面の右岸側に位置する。

歴史的背景

町内の遺跡は全部で40ヶ所を数えるが、これらの多くは町半分に広がる段丘部・洪積台地上に立地している。逆に南半分は、山地という立地条件もあるのだが遺跡は少ない（図３）。

縄文時代の遺跡としては、町南部の成合寺遺跡から石鏃が出土している。東円寺跡でも93－3区からも石鏃が出土しているのだが、明確な遺構を伴うものではないので、よくわからないのが現状である。

弥生時代の遺跡としては、大久保B・D・E遺跡が確認され、主に弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての遺物が多く出土している。とくに大久保E遺跡において自然流路から多量に遺物が出土しているので近辺に集落の存在が推測できる。

古墳時代の遺跡については、残念ながら不明である。遺構が存在しないばかりか、遺物すら確認できないのである。古墳参考地として五門古墳・五門北古墳が挙げられるのだが、既に消滅しているので詳細は不明である。

奈良時代になると、東円寺跡で掘立柱建物群を検出していることからして野田周辺の開発は奈良時代から始まったことが窺える。

奈良時代以降は、熊取町でも徐々に開発が始まり、中世に入ると町域の丘陵・段丘面上の土地利用が本格的に進む。平安時代末には、東曜寺（東円寺の前身）が建立されたと言われており、これを中心として集落が発展を見せるようになることが近年の発掘から判明している。また、東円寺跡推定域の東端と思われる97－13区には、焼土・炭混じりの土壙が3つ検出されている。さらに大浦中世墓地は15世紀を中心とする共同墓地であり、この時期の五輪塔や石仏などの遺物が出土している。

近世になると、明確な遺構を検出した例に乏しいが、多くの場合攪乱などにみられる瓦礫の中に、たくさんの近世・近代の瓦片、陶磁器などが混入しており、この時期においても引続いてかなりの規模の開発が行われたことが窺われ、近年行われた中家住宅に調査では、削平に遭いながらも遺存した埋甕や、陶磁器を検出しており、さらなる今後の成果に期待したい。

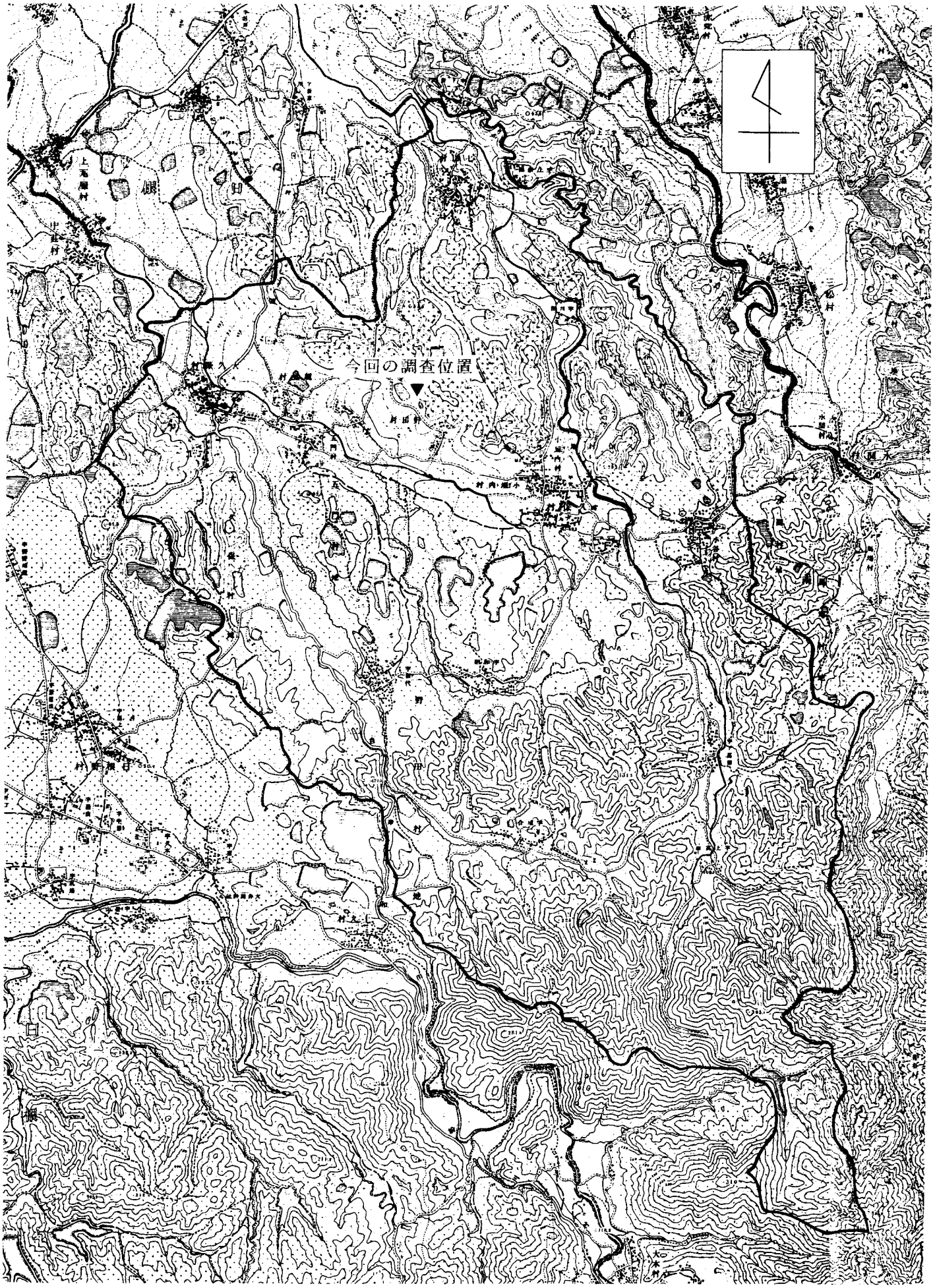


図2　熊取周辺図（明治19年仮製2万分の1図より縮小）

熊取町遺跡分布図

※平成8年3月現在

第3図　熊取町遺跡分布図（網かけは東円寺跡）

東円寺について

東円寺跡は、熊取町の北西部、大字野田に位置し、現在の熊取町の役場及び公民館付近一帯に広がる寺院跡・集落跡である。地形的には、大井出川の右岸上に形成される低位段丘上に位置している。

遺跡名である東円寺は、文献から古くは「東曜寺」と称していたことが窺え、大阪府による昭和60年からの発掘調査により出土した瓦器椀や軒丸瓦等から平安時代末頃に建立された寺院であると考えることができる。

熊取町役場付近には「トヨジ」・「東永寺」・「豊寺」の小字名が伝えられており、役場前の調査では寺院のものと思われる瓦が出土しているが、寺院としての明確な遺構は検出しておらず、詳細は不明である。

東円寺に関する文献における初見は、天文14年（1545）に記述されたとする「葛城嶺中記」であって、　次野田山本尊毘沙門同五大尊薬師弁財天天神二社鎮守也

との記述がある。

さらに元禄4年（1691）改写の「寺社境内帳」には、

野田邑　一真言宗　嵯峨仁和寺末　東円寺　詮明　開基年号不知、寛政八辰年八月廿八日入院高野山祥厳院末寺之処、右遠嶋被　仰付候二付、元文七年ヨリ仁和寺末寺ト成ル、当寺永代常燈料寄付有之、右油料五貫目当谷十五ヶ村江預置候段届有之、尤天明五巳年六月、日教順住職之時也、除地千九百八十四坪　天神小社　夷社　花表　釣鐘所

と記されている。

また、熊取町内の大庄屋であった中盛彬が文化12年（1815）に編述した「先代考拠略」には、

この野田宮ハもと野田山東曜寺といふ、上ミのた村の西に古跡有り（今も東円寺住持毎年正月四日、此処ニテ法式ヲ行フ、）今も登り立テ・大門・善福寺（東曜寺の寺中也、俗あやまりてセップク田ト云、）まいのう田・たらり田（ともに舞台の跡也）・風呂垣外（浴室の跡）・やけん地蔵（東曜寺焼亡の時残りし堂跡）・高野垣内（高野山より僧侶来り居し寮の跡といふ、）是ら皆田地の字なれり、東曜寺古跡の左右に北川の森、田中の森なと小キ古跡の林し七ツひしと並べり、いかさま大境内なりしと見ゆ、峯中記にいふ、野田山本尊毘沙門・五大尊・薬師如来也、弁財天・天神二坐鎮守也（今考えるに、この仏今ハ一体もなし、薬師も毘沙門もあれと、是ハ三代前の住持尊海法印あらたに納めたりし仏なり。）又もとハ甚大社にて寺ハその別当なりしといふ、此旧地、永禄の乱に社領をうしなひ、天正の乱にてあとかたなくなれ、この時、村民ら神体・仏像を負て逃レ、後に今の所（東円寺）に社祠を営ミテ鎮坐し、小庵を建て別当とす、寺号を東円寺とあらたむ（但し元禄の頃迄ハ東曜寺の寺号人々口唱に残りありしゆへに、東円寺をもとやうじと申せし也、故に寺社改帳にも豊寺と書きしあり、元禄の改帳に初て東円寺と定まり、高埜五の室谷祥厳院を本寺と頼申段記しあり、されとも今ハ御室御末寺也、是ハ尊海の代に如此せし也、）この内に薬師如来ハ大久保村正宗法禅寺に移す、（以下略）

と記載されている。

これらをまとめると、東円寺は元々、弁財天・天神二坐を祭る大社の別当であり、本尊毘沙門・五大尊・薬師如来を備えた、葛城修験道に関わる寺院で野田山東曜寺と称していた。しかし、永禄・天

正の乱により完全に焼失したが、薬師如来は大久保の法禅寺に移されたようである。江戸時代末期には田地となり字名としてのみ残っていたようである。その後時期は不明だが、別の場所に野田宮を再建し、その別当として小庵を建立し、その寺号を東円寺と改めている。

また、現在の熊取町立熊取中学校の小字名が元東円寺地・元東円寺跡・元野田宮・野田ノ宮などからして文献による近世の再建した寺は現在の想定されている東円寺跡よりも南である可能性があることが考えられる。もちろん発掘調査をおこなったわけではないので遺構・遺物が確認されておらず、小字名での推定だが、現在の熊取町役場周辺の小字名の豊寺・トヨジ・東曜寺・東永寺跡・大門などの小字名と比定してみると、別の場所での再建があったということが考えられ、それは先述の「先代考拠略」とも一致する。このことからして東円寺と東曜寺はちがう寺として意識しても良いのではないか。

その後の明確な記録は残っていないが、明治維新の廃仏棄釈によって東円寺は廃絶し、本尊や仏具は貝塚市地蔵堂の正福寺に、梵鐘は熊取町五門の慈照寺に移されたとされている。ちなみにこの梵鐘は太平洋戦争の時に供出され、現存していない。

＜参考文献＞

大阪府教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅳ」1983～1990
大阪文化財センター　「成合寺遺跡」1985
大阪文化財センター　「成合遺跡発掘調査概要」1984
和泉丘陵内遺跡調査会　「万町遺跡発掘調査報告書」1991
熊取町教育委員会　「熊取町史紀要　第1号　家記・先代考拠略」1985
熊取町教育委員会　「熊取町史　資料編Ⅱ」1995
熊取町教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要報告・Ⅰ～Ⅸ」1985～1994
熊取町教育委員会　「熊取町の寺院」1982
熊取町教育委員会　「熊取町の歴史」1986

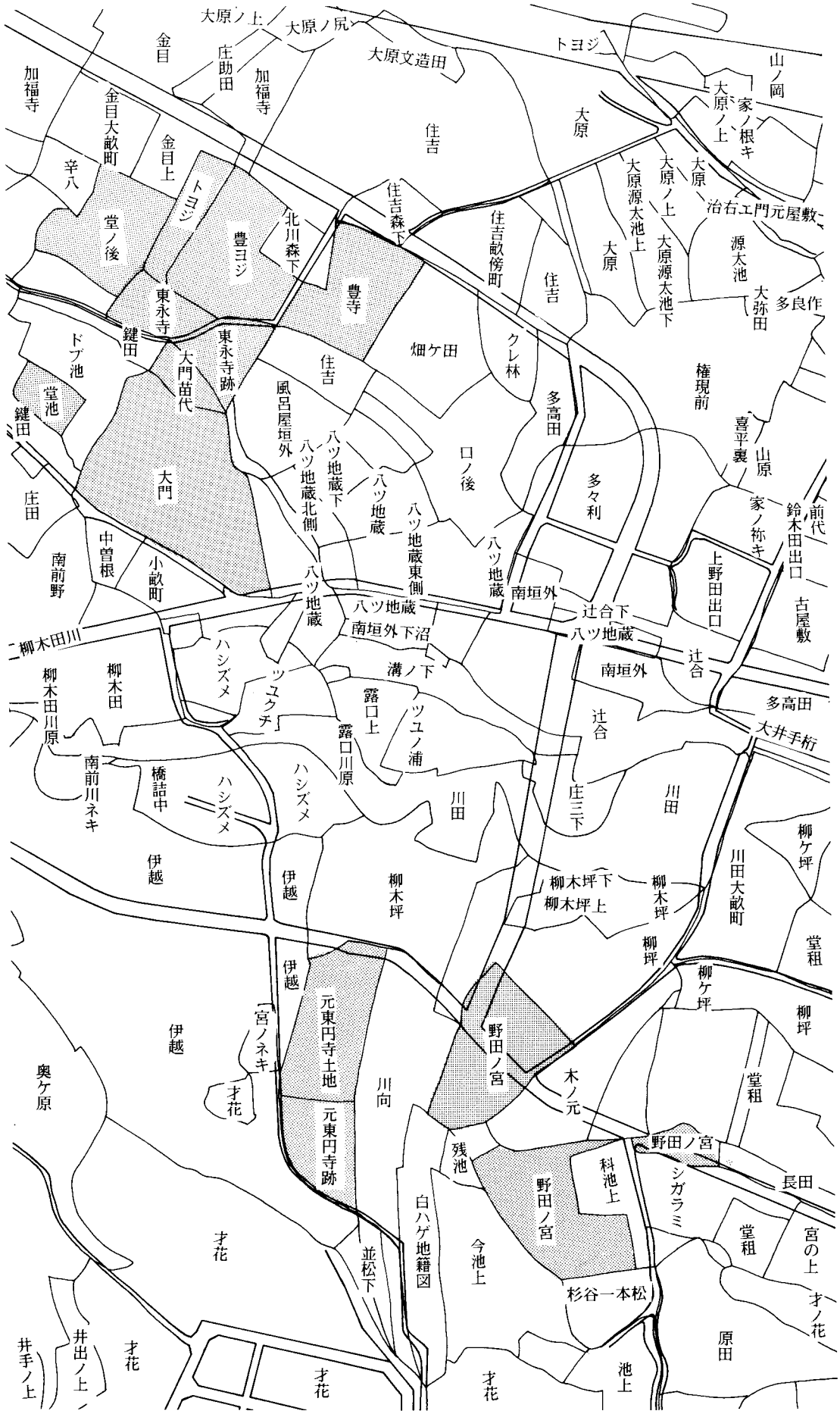


図4　東円寺跡周辺小字図

第２章　調査に至る経過

大阪府泉南郡熊取町野田・五門地内において、熊取町福祉総務課は（仮称）総合保健福祉センターの建設及びそれに伴う公用車車庫の移設工事を計画した。

当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「東円寺跡」に含まれることから、教育委員会文化課と福祉総務課との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、福祉センター建設地については平成9年7月3日、4日に試掘調査を実施することとなった。申請地に6ヶ所の調査区を設定し、重機及び人力により掘削したところ、北側の3ヶ所の調査区で、過去の大阪府教育委員会による国道170号線の調査時に検出されている遺構につながると思われる落ち込み状の遺構及び包含層を検出した。層序は大まかに4つに分かれており、第０層は現代盛土であり、第１層は主に近代から近世の作土層である。第３層は中世層であり、土器片や植物遺体を含む層である。特に第３層には土を盛った跡が見られ、瓦器の破片等の遺物を含んでいる。

この試掘調査の結果を基に再度協議を行った結果、遺跡の保存は困難との意見に達し、発掘調査（記録保存）を実施することとなった。また、公用車車庫移設地については、当地の小字名が「豊ヨジ」であり、寺院に関する埋蔵文化財が存在する可能性が高いと思われ、また面積も狭小であることから当初から全面発掘を実施することとなった。

（仮称）総合福祉保健センター建設に伴う発掘調査はＴＯＥ97－4区として平成9年9月1日から同年10月30日の期間、また公用車車庫移設に伴う調査については、ＴＯＥ97－16区として平成10年2月19日から同年2月27日の期間で実施した。

また、遺物整理及び本報告書の作成は、平成10年4月1日より実施し、本書の刊行を以て全ての調査を終了した。

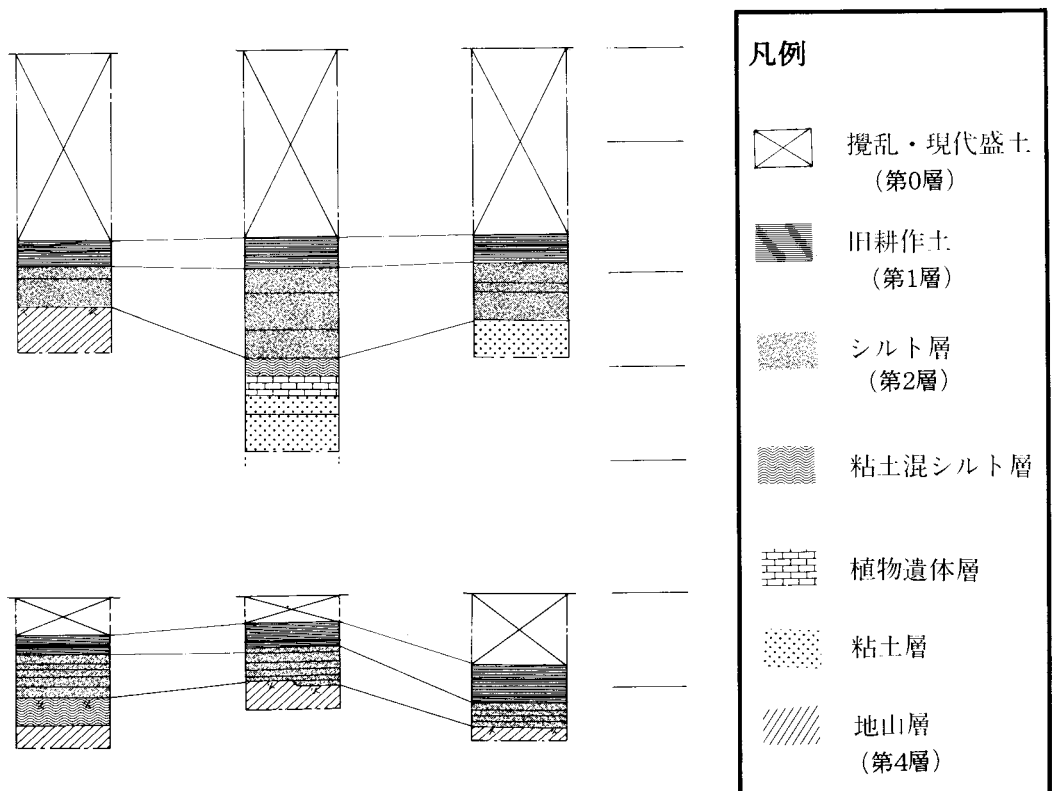


図5　東円寺跡97-4区試掘調査土層図

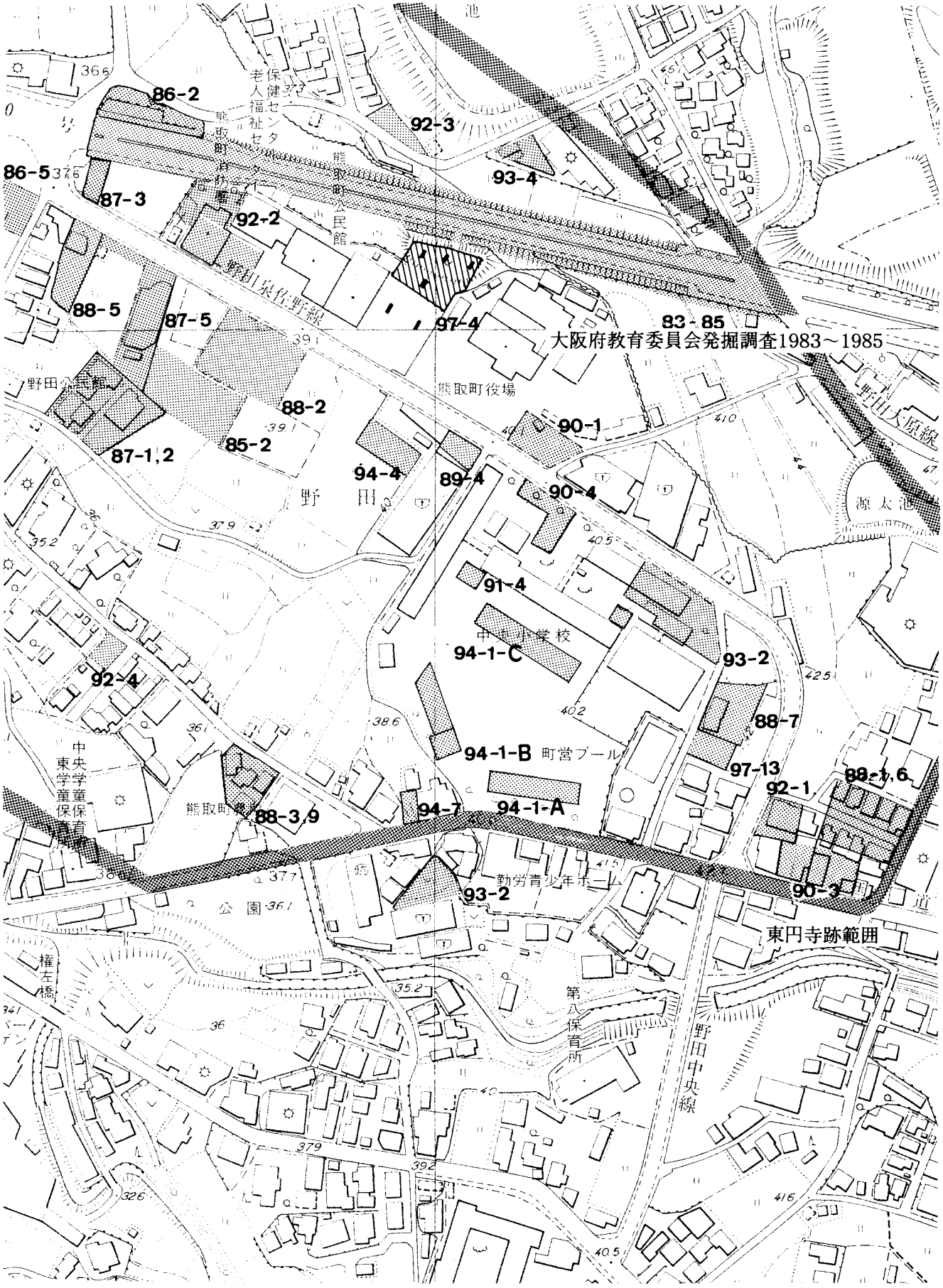


図6　東円寺跡97-4区試掘調査位置図（斜線部が今回の調査範囲）(S＝1/2500)

第３章　９７－４区の調査結果

第１節　調査区の地形と基本層序

調査前の状況は、盛土によって形成された熊取町の公用車・来庁者駐車場であった。

現代（第0層）

熊取町役場公用車駐車場建設に伴う地形改変である。同層は3種類見られる。まず上層から5cm位の厚さのアスファルトである。次はバラス層で30cm位の厚さである。その下1.5ｍくらいまでは厚い盛土層である。

現代（第１層）土層番号（1～4）

熊取町役場公用車駐車場建設以前の耕作土層である。昭和の中頃まで耕作が行われており、昭和42年の熊取町の航空撮影では水田であったことがわかっている。

近世（第２層）土層番号（5～8）

近世の耕作土層である。この層は微砂混じりのシルトであって一部では、鉄分を含み赤化している。撹乱を受けたりすることもなく安定していたと思われる。土色は2.5Y6/2灰黄色の粘質シルト層である。

中世（第３層）土層番号（9、10、14）等

中世（室町時代）の作土層である。この層は北区と南区では異なり、北区は主に微砂混じりのシルト層で構成されている。第３層は、瓦器片・土師器片、須恵器片・瓦片等の遺物を含む土層に分かれている。室町時代～近世の作土層（13）、室町時代の作土層（17・14）、鎌倉時代から室町時代にかけての遺物を多量に含む作土層（20）に分けることができる。

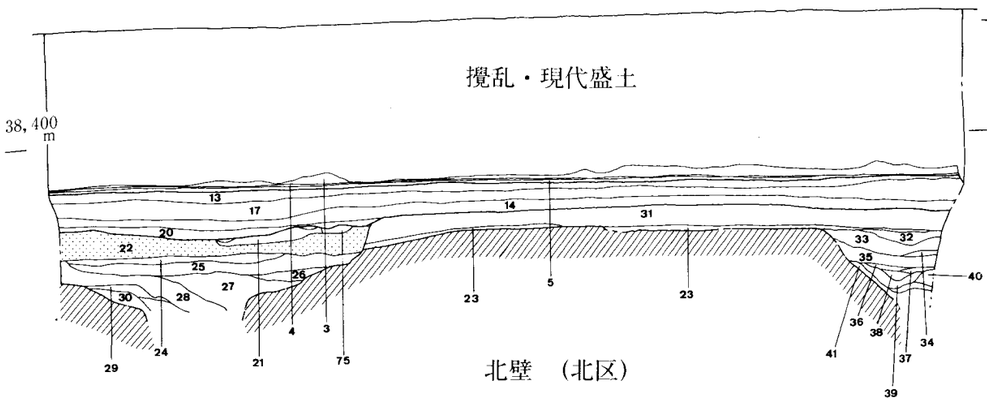
南調査区は、北調査区とは少し異なる層位部分があり、第1層と第2層は共通であるが第3層は北区の遺物包含層はなく、大粒のマンガンを含む層（10）がある。

中世以前（第4層）土層番号（24～30等）

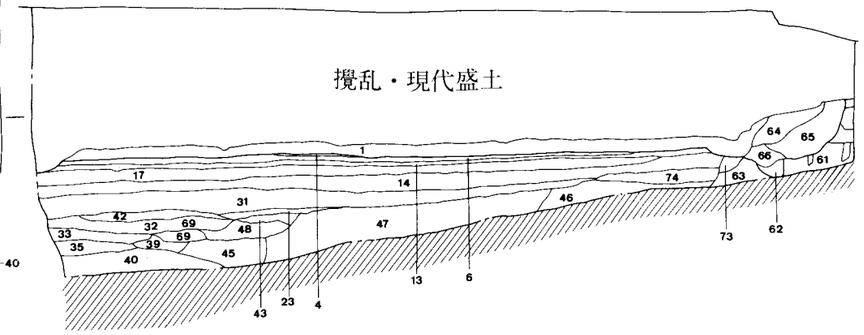
鎌倉時代以前の層である。しかし、年代を決定できるだけの遺物が伴っていないので詳細は不明である。

地山（第４層）斜線部分

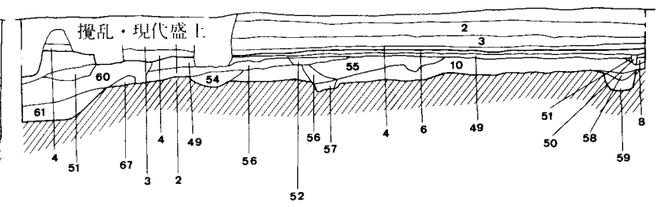
地山層は、7.5YR5/8褐色粗砂混じり粘土を基調としており、水分を多量に含んだ粘り気の多い粘土層である。



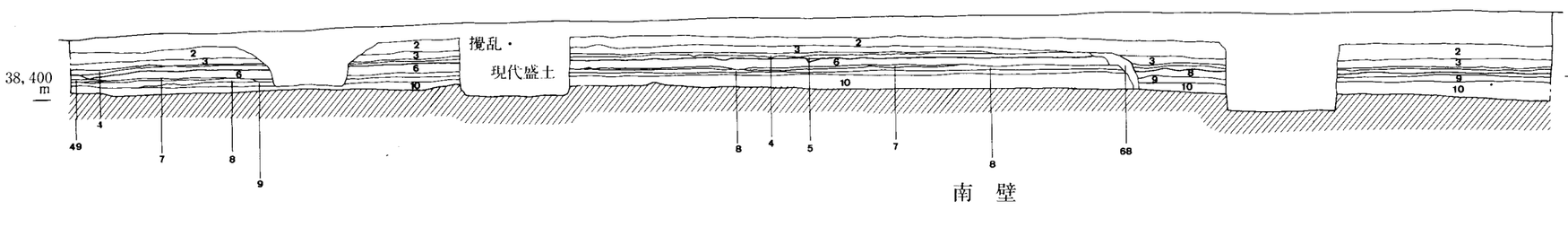
北壁　(北区)



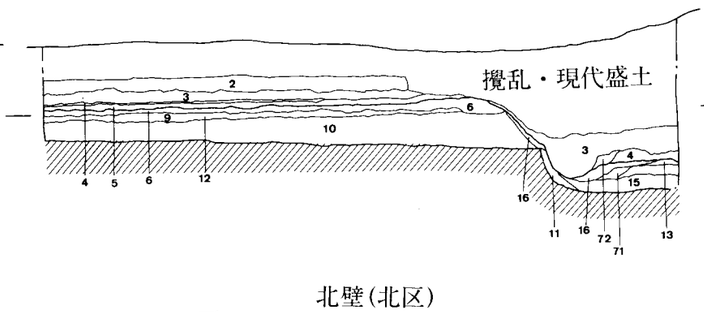
東壁　(南区)

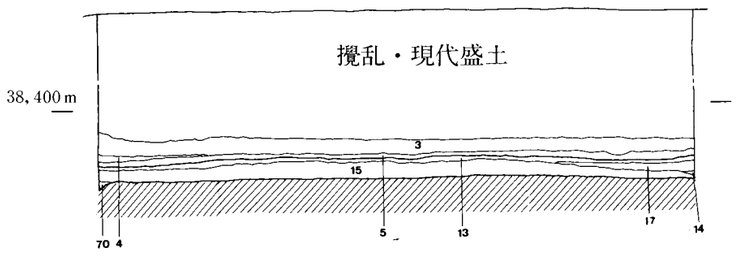


東壁　(北区)

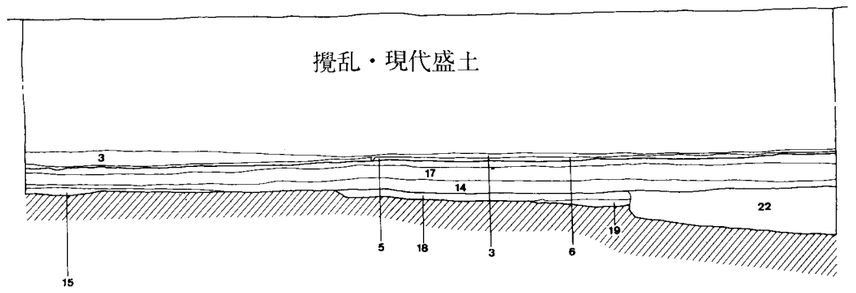


南　壁





西　壁　(南区)



北　壁　(南区)

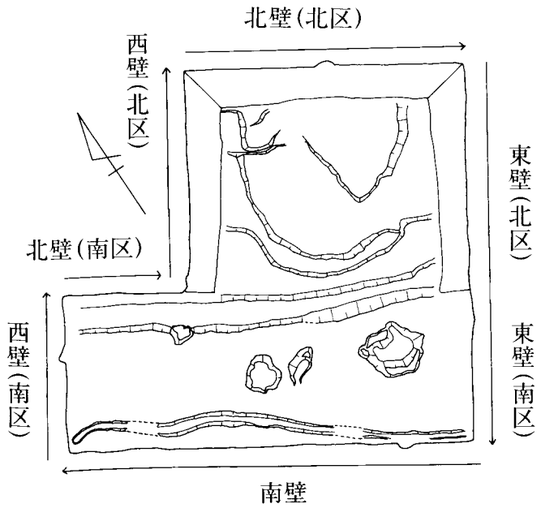


図7　東円寺跡97-4区壁面土層図

〈土色〉

1．砕石・バラス
2．砕石・赤石
3．N5/0灰色土（旧耕作土）
4．5Y6/1灰色土
5．10YR7/6明黄褐色土（床土）
6．10YR7/8明黄褐色シルト土
7．2.5Y6/2明黄褐色シルト土
8．10YR7/4にぶい黄橙色土
9．10YR6/6明黄褐色土
10．10YR7/8黄橙色土
11．10YR7/8黄橙色微砂混粘土
12．10YR7/4にぶい黄橙色土
13．2.5Y6/2灰黄色土
14．10YR5/1褐灰色土
15．10YR6/3にぶい黄褐色粘土混土
16．10YR5/4にぶい黄褐色粘土混土
17．10YR5/2灰黄褐色粘土混土
18．10YR5/2灰黄褐色粗砂混土
19．10YR6/3にぶい黄褐色微砂混土
20．2.5Y7/4浅黄色中砂混土
41．10YR7/8黄橙色小石混粘土
42．N5/0灰色粘土
43．2.5Y4/2暗灰黄色粘土
44．2.5Y6/2灰黄色粗砂混粘土
45．2.5Y6/1黄灰色土
46．2.5Y6/2灰黄色細砂混土
47．5Y5/1灰色粘土+10YR6/6明黄褐色土
48．2.5Y6/2灰黄色粗砂混土
49．10YR7/8黄橙色土
50．2.5Y6/1黄灰色微砂混土
51．2.5Y7/4浅黄色中砂混土（マンガン含む）
52．10YR7/8明黄褐色土+10YR6/6明黄褐色土
53．2.5Y7/2浅黄色土
54．2.5Y6/1黄灰色粗砂
55．2.5Y6/2灰黄色土
71．N5/ 灰色土+5Y6/1灰色土
72．10YR5/ 1褐灰色
73．2.5Y6/ 2黄灰色礫混砂
74．2.5Y6/ 1黄灰色土
21．2.5Y6/3にぶい黄色粗砂混土
22．10YR7/1灰白色礫混土
23．10YR4/4褐色粗砂混土
24．10YR7/1灰白色粘土
25．10YR6/1褐灰白礫混土
26．10YR7/1灰白色砂
27．2.5Y6/1黄灰色粘土
28．10YR5/6黄褐色粗砂
29．10YR6/2灰褐色粘土
30．10YR7/8黄橙色粘土
31．N5/0灰色粘土（植物遺体含む）
32．10YR5/4にぶい黄褐色粘土
33．10YR5/6黄褐色粗砂
34．2.5Y5/1黄灰色粘土
35．10YR8/8黄橙色粗砂混粘土
36．10YR7/1灰白色粘土+10YR7/8黄橙色粗砂
37．10YR7/1灰白色粘土
38．10YR8/1灰白色微砂混粘土
39．10YR6/1褐灰色中砂混粘土
40．10YR8/8黄橙色粗砂混粘土
56．10YR6/1褐灰色粘土
57．10YR6/3にぶい黄褐色粘土
58．10YR5/6黄褐色粘土
59．10YR6/3にぶい黄褐色細砂混土
60．2.5Y6/1黄灰色粗砂混土（三酸化鉄含む）
61．2.5Y7/2灰黄色粘土混土
62．2.5Y6/1黄灰色礫混土
63．2.5Y7/1灰白色粗砂混土
64．2.5Y6/2暗灰黄色土
65．10YR6/1褐灰色+10YR5/6黄灰色ブロック土
66．2.5Y7/2黄灰色粗砂混土
67．2.5Y5/1黄灰色シルト
68．10YR7/1明黄褐色土+10YR6/2黄灰色土
69．10YR6/2黄灰色中砂
70．10YR6/3にぶい黄橙色

第２節　検出した遺構

今回検出された遺構には、溝、溝状遺構2条、土壙7基、ピット7基、耕作跡がある。これらの遺構は概ね中世のものと考えられる。

第１遺構面

熊取町公用車駐車場を造成するために運ばれた5cmの厚さのアスファルトと2ｍくらいの客土を重機で掘削して検出した。検出された遺構は、水田・耕作に伴う溝・水路・落ち込みである。

水田は調査区の南側で確認され、鍬溝と思われる耕作に伴う溝を確認した。

遺構は旧耕作土を除去すると確認できた。昭和の中頃まで耕作が行われていたと思われる痕跡が見られ、ビニール製の肥料入れ袋であったり等々、様々なゴミが見られた。またこの時期まで使われたと思われる水路の跡が見られ木の杭の跡が検出された。水路の遺構は50ｍ先の田でも見られ、同じ水路だったものと思われる。

第２遺構面

近世～中世の耕作跡と考えられる。検出された遺構は、溝が1条・落ち込みである。

（溝1）　溝は、東西に長く約21ｍ、幅約50cm、深さ20cmを測る。土色は、10YR4/4褐色礫混じり粘土である。

（落ち込み）　落ち込みは第2面の水路から北側で検出され、北へ向かって少しずつ段がついて下がっていく地形であり、作土層が二層になっており、元々の地形として谷状だったと考えられる。この落ち込みは、先に大阪府教育委員会が昭和58年～昭和60年にかけて国道170号建設に伴う調査で谷状地形をしていることからして、谷状地形の続きだと考えられる。

第３遺構面

第３面は、中世の耕作跡である。遺構として検出されたものは、先述の落ち込み部分の下層遺構と溝が1条と土壙が7基、ピットが7基である。

（溝2）　溝は、溝1と同じように東西に長く、約22ｍ、幅約50cmを測る。土色は、10YR4/4褐色礫混じり粘土である。

（落ち込み）　第2面の落ち込みよりもう1段下に位置しており、この面の直上で多量の遺物が出土している。この落ち込みの特色は、まず20cm～30cm掘り窪めた後に地山土が入っている。またこの面の下からは洪水を起こしていたと考えられる自然河川跡であり、洪水にともなうラミナ状の層が拡がっている。ここを耕地化する以前の沼状地形の部分には、礫まじりの土を入れて地盤を固めて安定させていたことが考えられる。

（土壙1）　南側の段丘面に位置し、長径3.5ｍ、短径3.0ｍ、深さ54cmを測る不定形土壙である。土色としては褐灰色礫混じり粘土10YR6/1である。土壙の中心側には、黒い土色の部分が認められるが、遺物をまったく含んでおらず、遺構の実年代は不明である。

（土壙2）　土壙2は、土壙1と同じく南側の段丘面に位置し、長径2.2ｍ、短径1.2ｍ深さ40cmの不定形土壙である。土色は褐灰色礫混じり粘土10YR6/1である。遺構から遺物は全く検

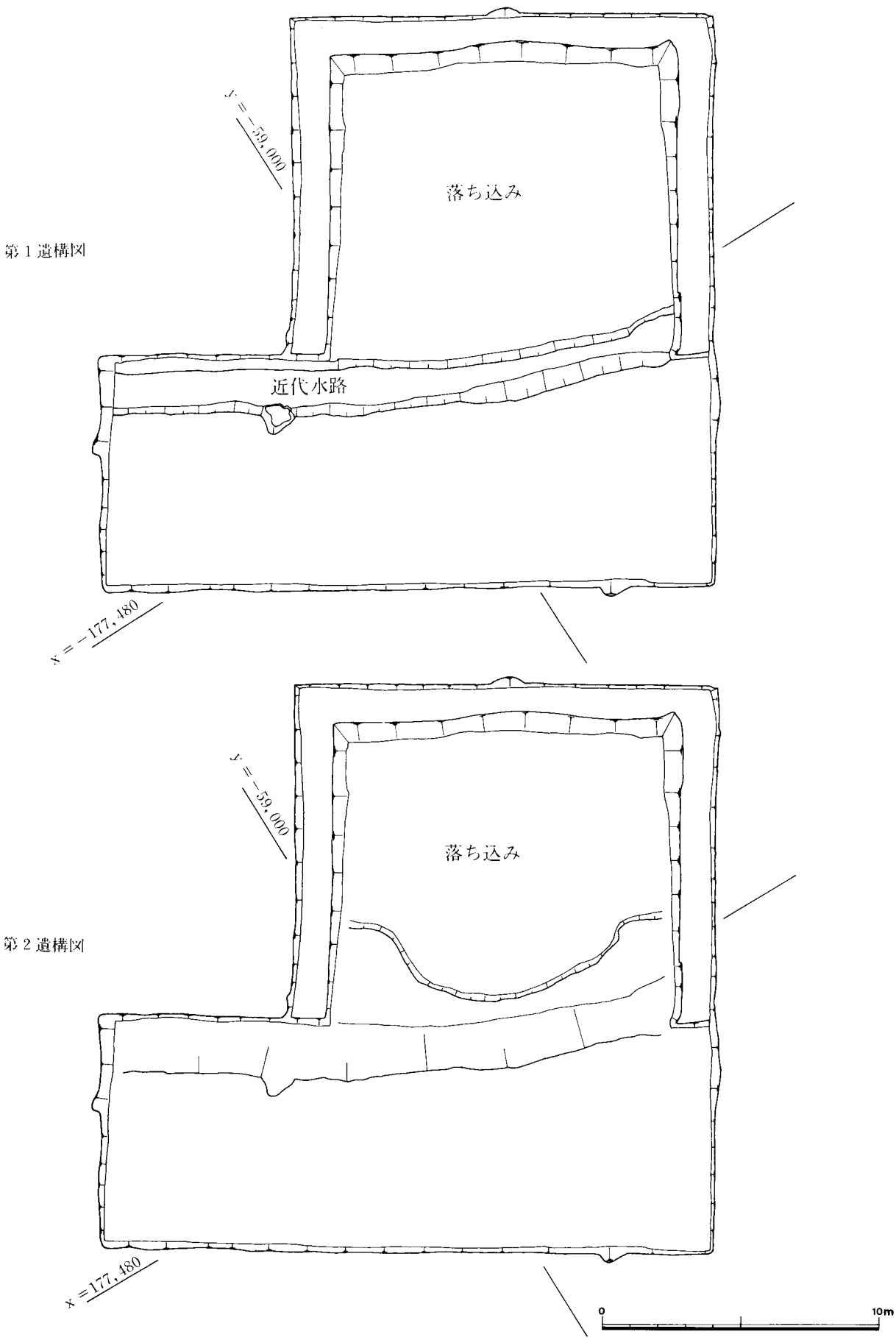


図8　東円寺跡97-4区第1・第2遺構面遺構配置図

出せず遺構の実年代は不明である。

（土壙3）　土壙1、土壌2と同じように南側の段丘面に位置し、長径2.1ｍ、短径1.7ｍ、深さ50cmである。土色は、褐灰色礫混じり粘土10YR4/6である。この遺構内に遺物を全く含んでおらず、遺構の年代は不明である。

（土壙4）　土壙4は、南調査区に位置しており長径50cm、短径25cm、深さ37cmを測る。土色は黄褐色粘土10YR5/6である。遺物を伴うものではないので遺構の実年代は不明である。

（土壙5）　土壙5は、南調査区の西側に位置しており、長径50cm、短径50cm、を測る。溝2と切りあっているため全体の様相は不明である。土色として明黄褐色粗砂混じり土10YR6/8である。遺構から遺物は検出せず、遺構の実年代は不明である。

（土壙6）　土壙6は、溝2を挟んだ土壙5の向かい側に位置し、長形径60cm、短径20cmである。

（土壙7）　土壙7は、土壙1と土壙2との間に位置する長径80cm、短径20cm、深さ45cmの楕円形の土壙である。土色は黄褐色粘土10YR5/6である。遺構から遺物は検出できず、遺構の年代は不明である。

（ピット1）　土壙1の東側に位置しており、径は20cm、深さは28cmを測る。

（ピット2）　土壙1の南側に位置しており、径は25cm、深さは43cmを測る。

（ピット3）　土壙1と土壙2との間の南側に位置しており、径は15cm、深さは30cmを測る。

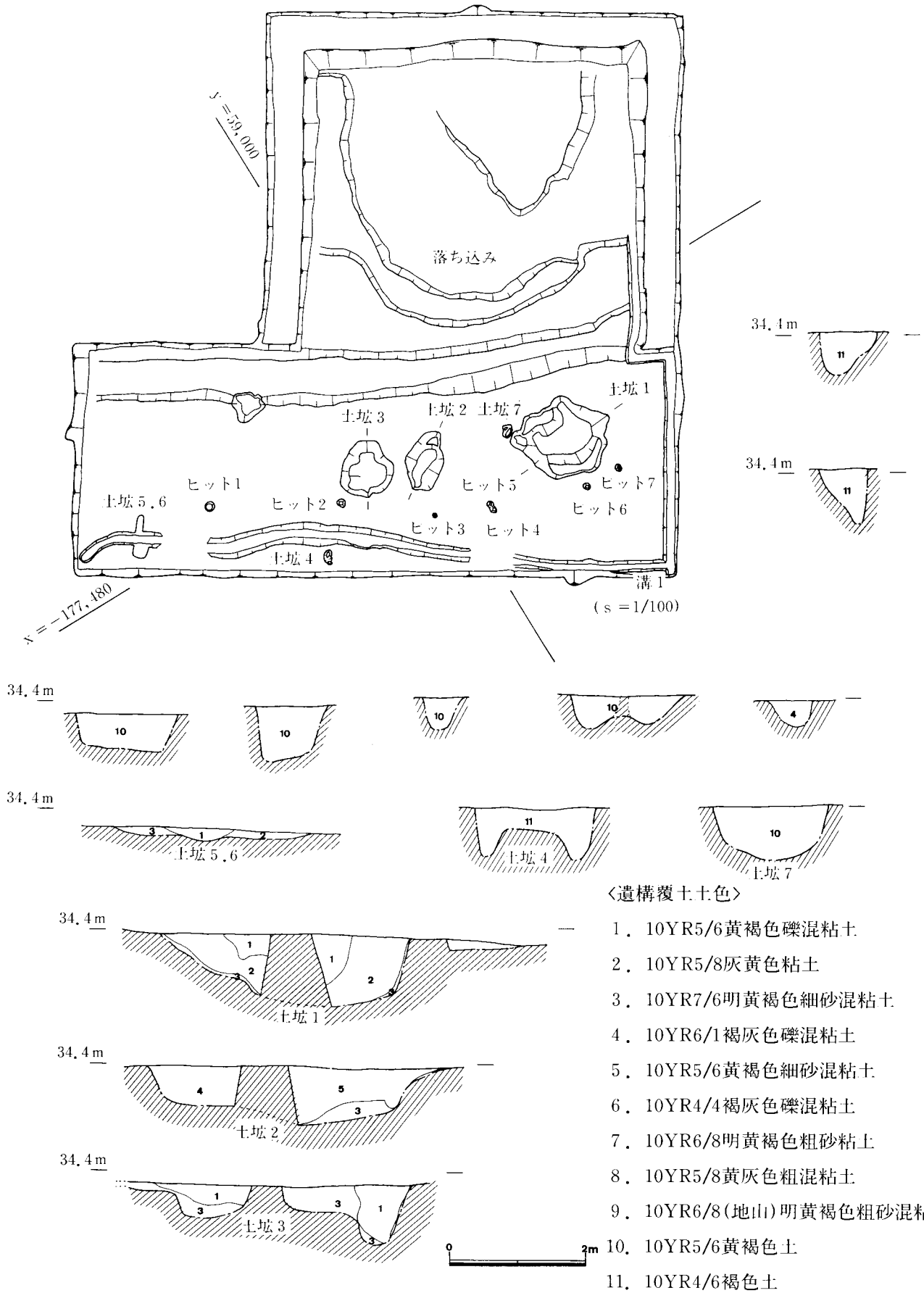
（ピット4）　ピット3の南側に切りあって位置しており、径は20cm、深さは25cmを測る。

（ピット5）　土壙2の南側に位置しており、径は20cm、深さは22cmを測る。

（ピット6）　ピット6は、土壙3の南側に位置しており径は30cm、深さは30cmを測る。

（ピット7）　ピット7は、土壙3と土壙5、6の間に位置しており、径は35cm、深さは40cmを測る。

ピットの土色はいずれも褐色粗砂混じり粘土10YR4/6である。この面の遺構は全く遺物を含んでおらず詳細は不明である。



〈遺構覆土土色〉

1．10YR5/6黄褐色礫混粘土
2．10YR5/8灰黄色粘土
3．10YR7/6明黄褐色細砂混粘土
4．10YR6/1褐灰色礫混粘土
5．10YR5/6黄褐色細砂混粘土
6．10YR4/4褐灰色礫混粘土
7．10YR6/8明黄褐色粗砂粘土
8．10YR5/8黄灰色粗混粘土
9．10YR6/8(地山)明黄褐色粗砂混粘土
10．10YR5/6黄褐色土
11．10YR4/6褐色土

図9　東円寺跡97-4区第3面遺構配置図

第３節　出土した遺物

遺物は、平安時代以降の遺物が主であり、点数になおすと約1460点である。その内訳は、土師器・土師質土器268点、瓦器・瓦質土器986点、須恵器・須恵質土器26点、黒色土器2点、石製品1点、瓦31点、陶磁器20点、青磁8点、その他である。機種別として、皿、椀、鉢・釜・甕・壷・擂（捏）錘・瓦である。

第１層遺物（図10）

第1層の遺物は2点あるのだが図化できたのは僅か1点である。（1）は染め付け磁器である。いわゆる18世紀以降の「くらわんか」碗であろうと考えられる。底部内面に円形状の釉薬が剥がれている痕跡が見られ、重ね焼きした跡が考えられる。

第２層遺物（図10）

第2層の遺物は細片ばかりであったので図化することはできなかった。

第３層遺物（図10・11）

第3層の遺物は、974点確認され、そのうち79点については図化することができた。遺物は、瓦器椀・皿類、瓦質甕、輸入青磁、須恵質擂（捏）鉢・杯・瓶子があげられる。

①土師質土器

土師質土器は260点確認されたが、図化できたのは僅か4点であった（2～5）。（2）は土師質の皿である。白色で表面が剥離しやすく、外面にはユビオサエのあとが僅か見られるが遺存状況が悪く調整は不明である。（3～5）は、土師質のおもりである。（3・4）は楕円形のもので、（5）は棒状である。手づくねで作られたと考えられ、ユビオサエが施されている。

②須恵器・須恵質土器

須恵器は26点確認されたが、そのうち10点については図化することができた。（6）は壷の口縁である。（7・8・9・10・11）は杯である。内面・外面の調整方法として（7・8・9・10）は回転ユビナデが施されている。体部が途中で屈曲し上外方へまっすぐのびて、端部は丸くおさめる。外面には粗いナデが施されている。（7）の高台部分は貼り付けである。（11）の底部には糸切痕が見られる。壷と杯の出土から考えてみると年代は奈良時代の中頃を上限として、平安時代の初め頃を下限とすると考えられる。

（12～15）は擂（捏）鉢の口縁部分である。外面にはヘラケズリが施されている。内面にはハケ調整のちナデすり消し目を縦方向に施している。いずれも東播系の擂（捏）鉢と考えられる。

③瓦器・瓦質土器

瓦器・瓦質土器は963点確認されているが、そのうち50点については図化することができた。（16～66）は瓦器皿である。（31）のみが75％残っているほかは、ほとんど破片である。（31）は外面ユビオサエを施し、内面底部にハケ状工具のようなものを用いている。その他の瓦器皿は内面・外面ともにヨコナデで外面にはユビオサエが残っている。全体的に遺存状況が悪く、調整がわかりにくいものが多い。（32～62）は瓦器椀で、（32～39）は底部破片である。高台形態として断面台形・三角形のものに分かれる。（38・39）は底部内面の見込部に斜格子状暗紋を施している。（40～62）は瓦器椀の体部部分である。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデが施され

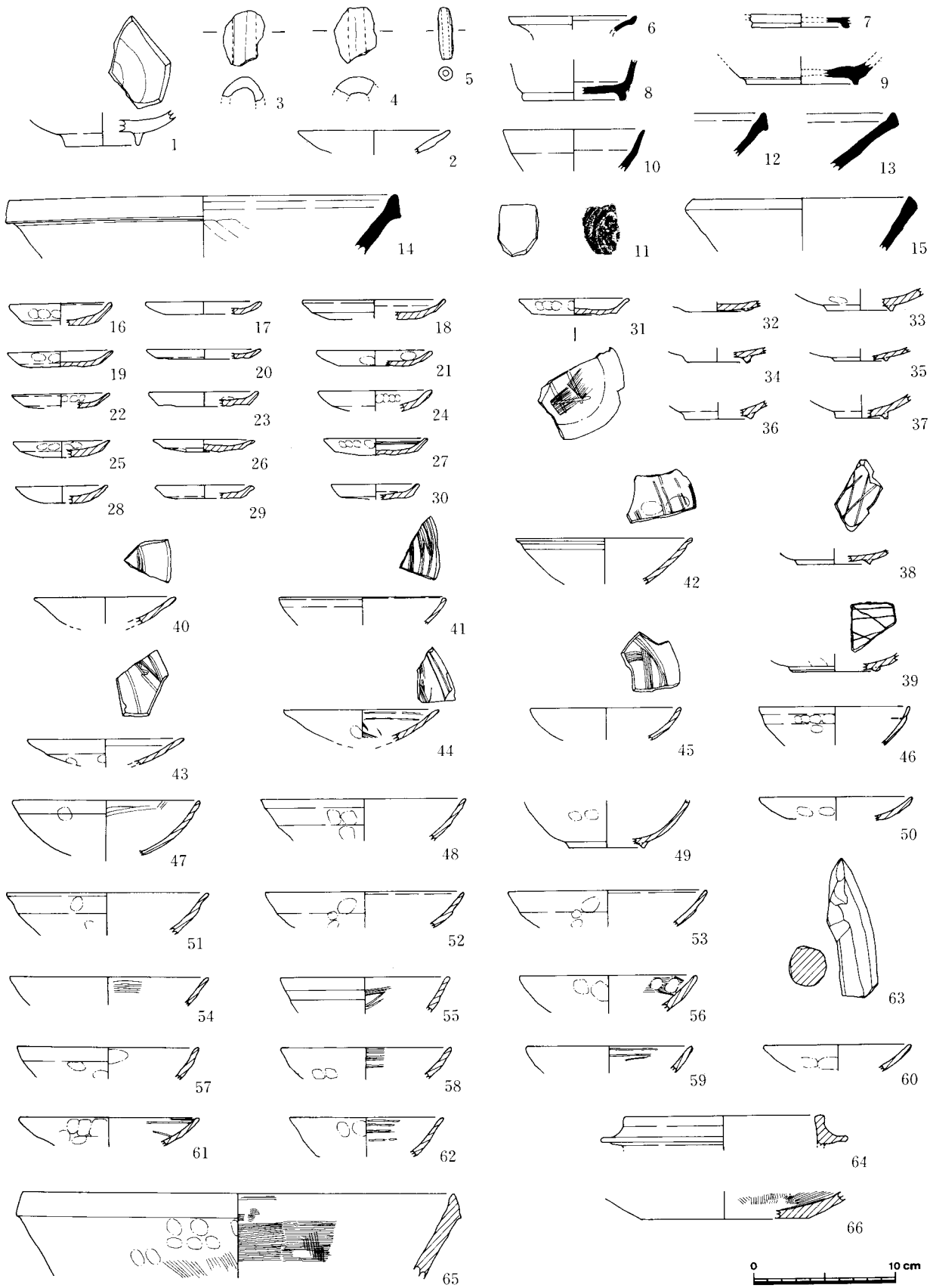


図10　東円寺跡97－4区遺物実測図（その1）（1/4）

ており、内面は連続線上の暗紋が施されている。（64）は瓦質の釜の足と考えられるものである。（65）は瓦質の羽釜である。口径が12cmと小さく、表面が剥落しているせいか胎土に砂粒が目立ち、焼成もあまく感じられる。（68・69）は瓦質の擂（捏）鉢であり、（62）が口縁外面はユビオサエ・ヘラケズリが施され、内面には強いヨコハケが施されている。（66）は底部部分である。内面に卸目が施されている。

④黒色土器

黒色土器は破片で2点確認されたが、かろうじて図化できたのは1点であった。（67）は黒色土器の高台部分と考えられる。表面が剥離しており遺存状況が悪く、調整は不明である。

⑤輸入陶磁器

輸入陶磁器は全部で8点確認することができたが、完形のものはない。そのうち6点については図化することができた。（73）以外は竜泉窯系の青磁と考えられる。（68・69）は鉢であると考えられる。（70～72）は椀であると考えられ、（70）は外面に蓮華紋がヘラ書きで施されている。（72）は内面に飛雲紋がヘラ書きで施されている。（73）は同安窯系青磁碗であると考えられる。体部はやや内湾気味に外上方に立上り、体部上位には若干内側に屈曲して、口縁はやや外反する。内面見込と体部との境界には沈線状の段を有し、内面上位には外面にみられる屈曲に対応するように沈線を巡らせる。外面は粗い櫛目紋を施し、内面には細かい櫛目紋を施す。釉は体部2/3までかけられており、色調はうすいうぐいす色である。

⑥砥石

（74）は砥石である。長径は8.7cmを測り、短径は2.8cmを測る。4面を使用した痕跡があり、両端が欠損している。

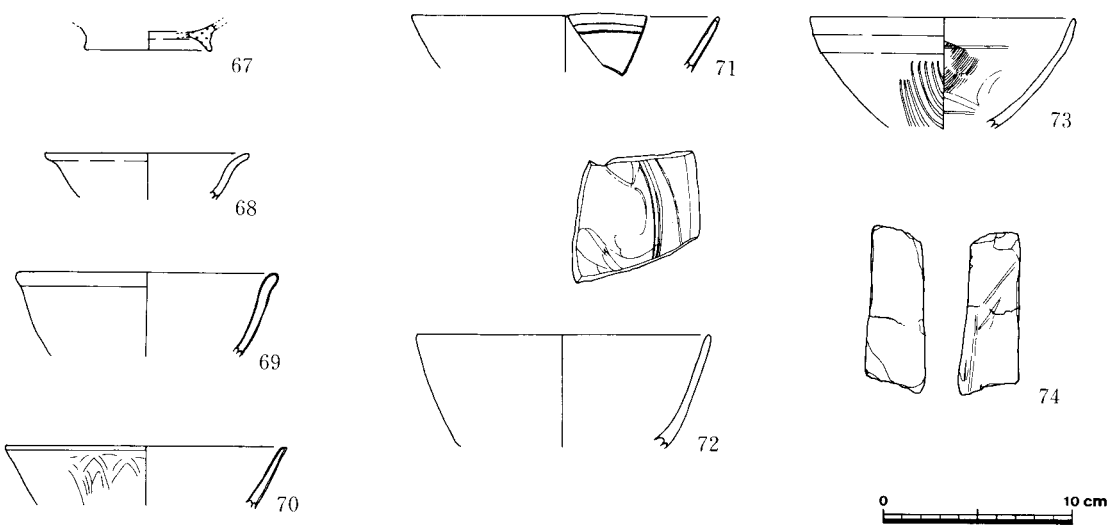


図11　東円寺跡97－4区遺物実測図（その2）（1/4）

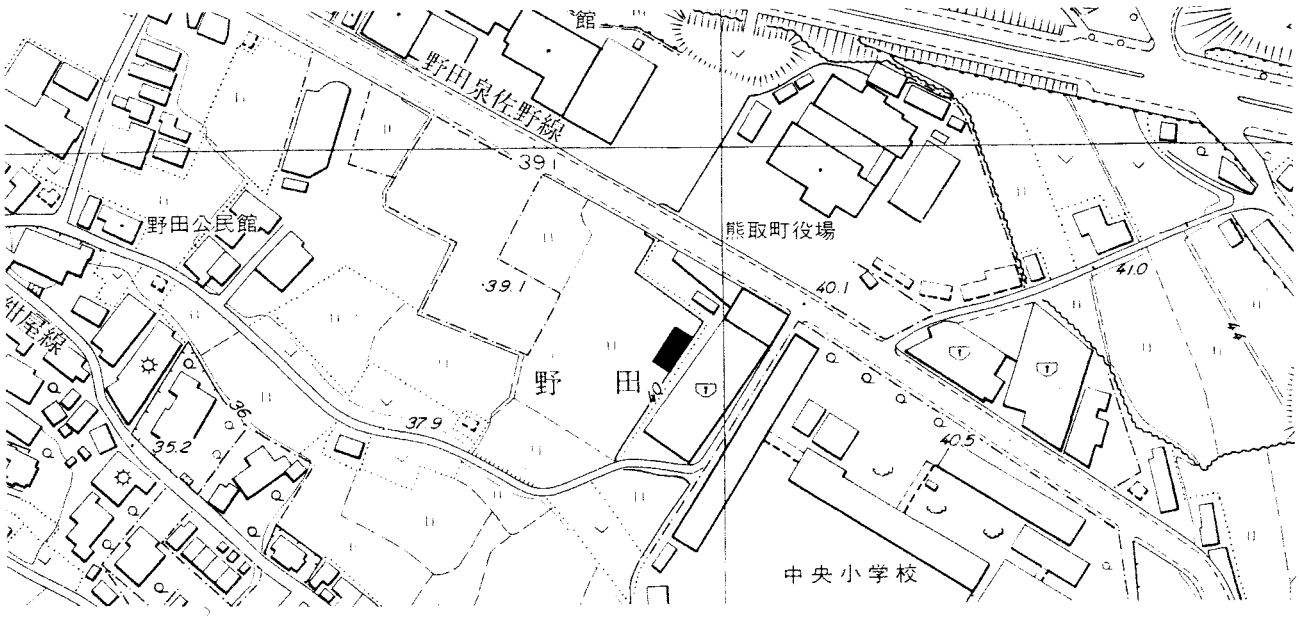
第４章　９７-１６区の調査成果

（仮称）総合保健福祉センター建設では、建設予定地に存在している町公用車車庫を図12に示すように役場前の駐車場内の地点に移設する工事が予定されていた。当地点は東円寺跡のほぼ中心地点に位置する。小字名は「豊ヨジ」であり、寺院の中心的な施設が存在していた可能性の高い特に重要な地点であるため、平成10年2月19日～2月27日の間、本調査を実地した。

調査区はほぼ車庫の寸法どおり、13×6m（78m²）で設定し、機械および人力掘削で調査を進めた。

土層は図12のとおりである。検出面となった黄褐色粘質土３は以前に大きく削平をうけている。これは明らかにこの上にあった耕作土（地味土）を機械で排除した痕跡と考えられる。削平された地山面の直上に存在する盛土層とバラスは、現在の地表面と同じ高さにするために近年行われた造成時の盛土である。また東壁には一部旧の耕作土が観察できたが、これは比較的新しい時代のもので、東壁よりさらに東の調査区域外にひろがっていると考えられる。

遺構・遺物は一切検出できず、また東円寺につながるものも存在しなかった。



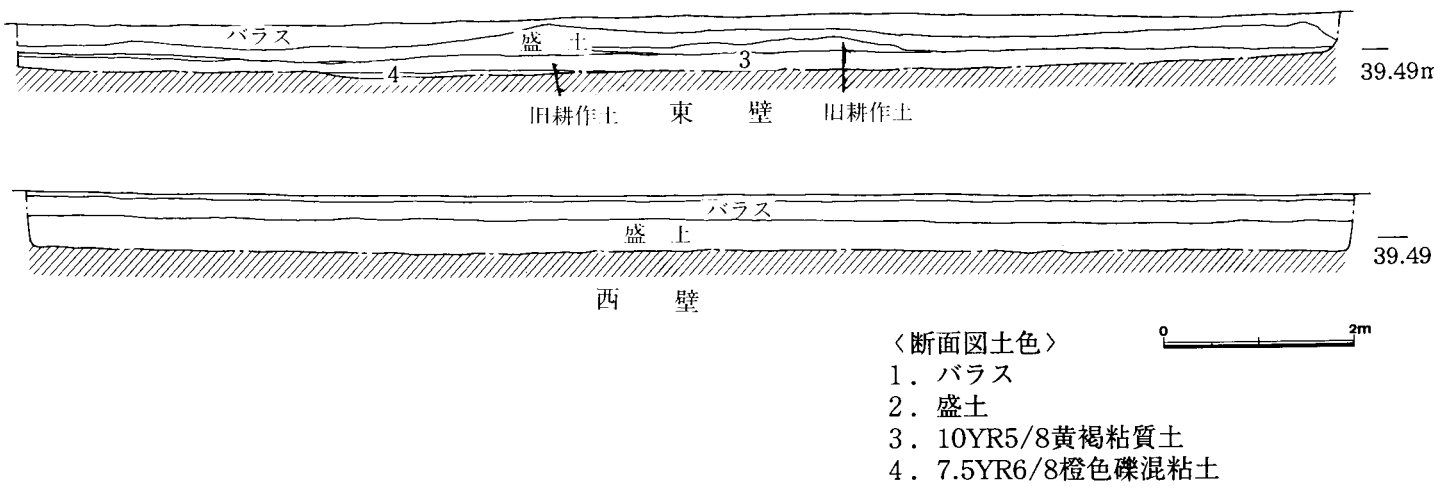


図12　東円寺跡97-16区位置図・壁面土層図

第５章　ま と め

（仮称）総合保健福祉センター建設工事に先だって行われた熊取町野田所在の東円寺跡の発掘調査で、数々の知見を得ることができた。以下列記する。

調査は熊取町役場と熊取町公民館との間に位置し、旧公用車駐車場の跡地において調査区を設定して行われる。かつての調査区の立地環境は一様ではなく、地理的には「東円寺跡」の集落が展開される野田地区の丘陵地帯の東北部分に展開する。南側から北側へと丘陵地帯の平地部、丘陵地帯の緑辺部、他に谷状地形に分類される。

最も南側の地区は丘陵地帯の平坦部分であり、そして丘陵地帯と谷状地形との変化地点にあたる。そこから北側へ段々と谷状地形の落ち込みが続いており、やがて谷底へと向かう。

調査区における土層と標高を概観すると、調査区の周辺の環境に応じた標高の変化が現れる。第1層から第2層までは整地・客土されて水平堆積して平均化されており、第3層からの標高の変化が最も立地の環境の違いを示すものであろう。

遺構面と遺物を概観すると、建物跡や溝などの生活遺構は確認することができなかったが、今回の調査では北側に自然河川が検出され、14世紀中頃まで存在していることが遺物の出土状況で確認した。その後、一気に自然河川は耕地化したのである。これは安定した広範な農地を得るためには全体的に平坦な土地にする必要があり、起伏のあった旧地形は高い部分を削って低い部分に土を充当したと思われる。北側の壁面図を観察してみると、自然河川と考えられる層に地山土が入れられている。これは、自然河川の一部が沼地化しており、そこに砂礫混じりの地山土を入れて土壌の安定化を図っている。
このような大規模な土地改良開発が行われたのは東円寺の周辺では何回かあって、今回検出した自然河川の埋め立てについては、先述の通り遺物から比定すると室町時代であろう。

南側の土壙1～土壙3までの遺構は、遺構の切りあいが分かりにくく、地山土に近い土質であることと、一部に地山土が混入しているところから、あえて遺構と考えるとすると倒木痕ではないだろうかと考えられる。

遺物はやはり既存の調査と同じく、中世の瓦器・瓦質土器・須恵器・瓦が主で特に瓦器・瓦質土器類が目立つ。また瓦質土器は火鉢・火舎などの大型の瓦質土器が全く出土していない。このことから東円寺（東曜寺）が寺院として機能していたのは、少なくとも室町時代以前で出土している土器から12世紀後半から13世紀中頃までと考えられる。また東円寺（東曜寺）の瓦はほとんど赤化していることに気がつく。これは瓦の焼成の失敗（生焼け）と考えるよりも火災又は兵火に遭ったと考えることができよう。

上記の瓦の赤化に関連することで今回の調査区から東側にあたる92-1区において柱穴1・6から東円寺（東曜寺）の複弁式軒丸瓦が根石に転用された状態で出土して、遺物の出土状況から13世紀後半から末にかけて建物が建てられていることから、13世紀の中頃かそれ以前に寺院衰退の可能性があるということである。これは遺物からも推測することができ、根石にしていた軒丸瓦が赤く変化を受けている。そして88年度6区SD-1と88年度1区SD-1との間に微妙な断絶時期が見られるのである。東円寺（東曜寺）の中世出土遺物を整理すると、瓦器は13世紀中頃の遺構から出土していないのである。

また12世紀後半からの遺物を整理すると和泉地方の遺物の出土状況と類似する。12世紀後半～13世紀初頭に関しては出土する遺物に紀州系と考えられるのものが含まれている。種類は皿・土釜であるが、皿は外面底部に糸切痕、内面にはヘラケズリを施しているのが特徴である。皿は・大小2種類の存在が確認されている。

土釜は12世紀後半に出現したと考えられ、東円寺（東曜寺）の創建時期ともほぼ一致する。従って少し想像を豊かにすると東円寺（東曜寺）の創建には紀北地方の権門社寺（高野山）が絡んでいると考えられる。後々泉州地方に大きな影響を与えた根来寺は高野山から成立する以前であると言う時代背景と、一つ丘陵を隔てた泉佐野市日根野に位置する日根荘の成立に元久2年（1205）に高野山の僧が開発を企てており、小字名に高野垣外があったということからを考え併せると高野山の勢力が何らかの形で絡んでいると考えられるのではないだろうか。

今回の調査でも東円寺の寺域の確認には至らなかった。しかし検出した遺構から埋没した自然河川と耕作跡を確認できた。そして赤く変色した瓦破片が出土することによって自然河川は少なくとも13世紀の中頃以降に埋め立てられたことがわかり、東円寺の北側地域の環境がわずかながら解明された。今後の東円寺跡の発掘調査に期待したい。

〈参考文献〉

大阪府教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅲ」1983～1985
大阪府教育委員会　「大園遺跡発掘調査概要Ⅴ」1981
大阪文化財センター　「成合遺跡発掘調査概要」1984
大阪文化財センター　「成合寺遺跡」1985
大阪文化財センター　「日置荘遺跡発掘調査報告書・本文編・考察編」1995
大阪府埋蔵文化財協会　「山直中遺跡」1988
堺市教育委員会　「陶器・小角田遺跡」1988
日本中世土器研究会　「中近世土器基礎研究」1985
日本中世土器研究会　「中近世土器基礎研究Ⅲ」1987
熊取町教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅸ」1985～1994

東円寺跡中世出土遺物の基礎検討

第１節　はじめに

東円寺跡は平安時代後期以降の寺院・集落跡である。しかし現時点では、寺域に関する遺構は検出されていないので分からないことが多い。遺物については、現在遺物が検出されているのは東地区・西地区のみである。検討する遺物については、平安時代後期以降の遺物について述べる。参考として『日置荘遺跡』「大阪文化財センター」1995、『概説　中世の土器・陶磁器』「中世土器研究会」1995を参考とする。以下遺物の変遷と検討を行う。

第２節　時期別検討

１，12世紀以前

該当する時代の遺物として黒色土器が挙げられる。しかし、表面が剥離しており、高台部分しか残存しておらず詳細は不明である。

２，12世紀～13世紀

土師質皿・土師質土釜・瓦器椀・皿・須恵質甕・須恵質擂（捏）鉢・青磁碗が見られる。この時代の特徴として紀州系の土師質皿と土師質土釜のセットとともに瓦器椀が出土している。紀州系の土器は岬町・阪南市・泉南市・泉佐野市・貝塚市・岸和田市・和泉市等、泉南一円で出土している。土師質皿は赤褐色の胎土で底部外面に糸切り痕・ヘラケズリを明瞭に残しているのが特徴で大小二種類が確認されている。土師質土釜はやや茶褐色の胎土で鍔の部分が大きく張り出しているのと、口縁部分が外反するのが大きな特徴である。この時期の瓦器椀は黒色土器の影響を受けたものも見られ、外内面共に細かいミガキが施されている。この時期の瓦器椀の焼成が良好・不良なものとに分かれるのもこの時期の特徴であり、その実体はまだ解明されていない。またこの時代の高台は、台形などに整形されたもので黒色土器の影響を残している。須恵質の土器は甕と（捏）鉢が出土している。青磁は碗と鉢が確認されている。青磁は同安窯産と思われるもので、類例が日置荘遺跡において出土している。

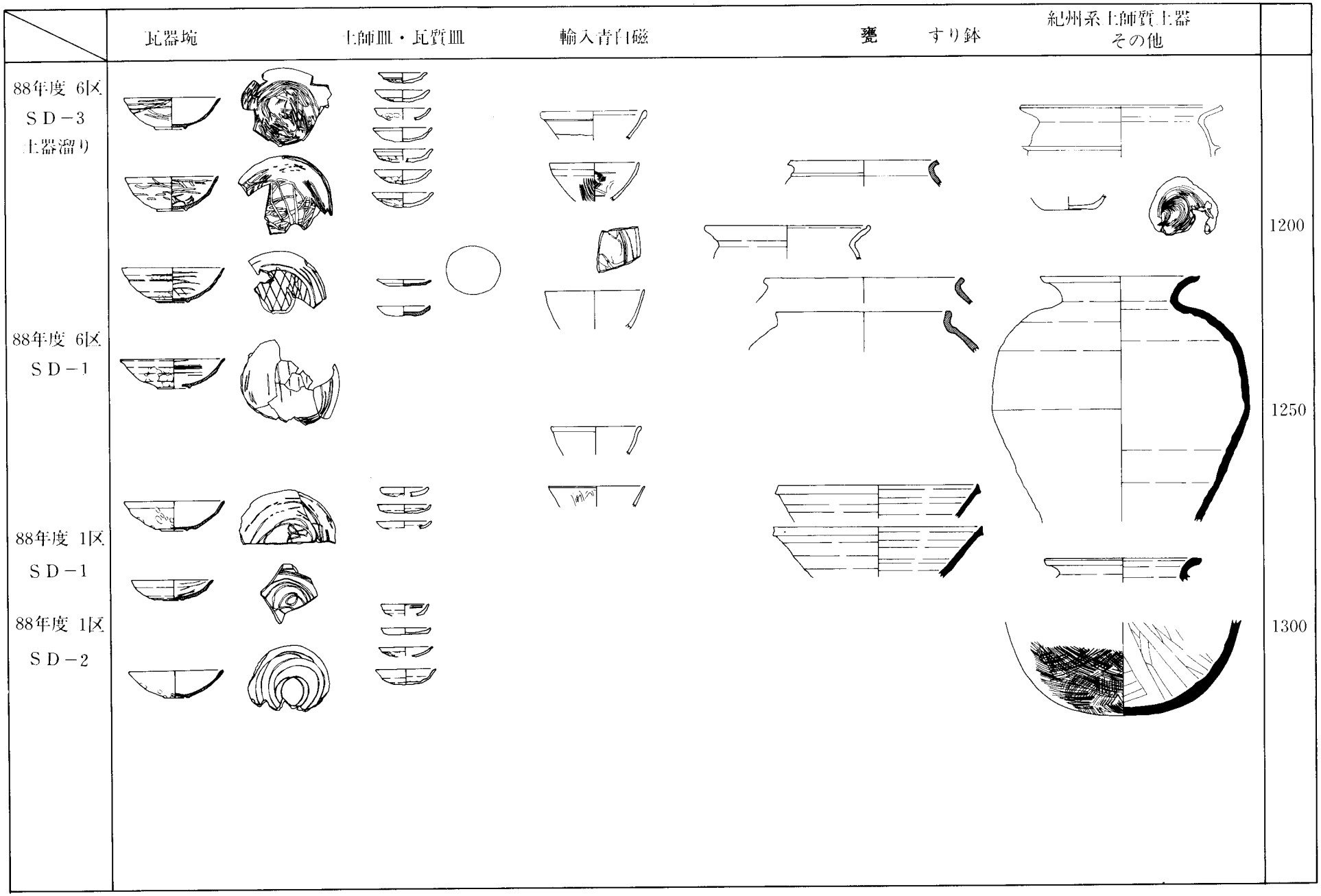
３，13世紀～14世紀

土師質皿・瓦器椀・瓦器皿・須恵質甕・常滑焼壷・珠洲焼甕・青磁碗などがあげられる。器種構成は12世紀・13世紀とあまり変わらない。しかし遺物の量は最も多く出土する時期である。また遠隔地からの遺物が出土していることも特徴で、東海系の常滑焼の壷や北陸系の珠洲焼の甕などが出土している。それと変わって前時代に出土した紀州系の遺物は見られなくなるのである。この時代の瓦器椀は前時代と比べて器高が低くなり、高台の作りも粗くなり、粘土紐貼付で、外側のミガキは省略され、内側の底部のミガミは格子目状になる。

４，14世紀～15世紀

瓦器椀・瓦器皿・瓦質釜（羽釜）・青磁碗・東播系擂（捏）鉢があげられる。この時代の瓦器椀は外面底部の高台に注目すると、前の時代からさらに退化が進み、いわゆる粘土紐貼付で椀としての機能を失いつつあり、瓦器椀は瓦器皿へと移り14世紀中頃には消滅する。12世紀，13世紀に見られた紀伊産の土師質土釜は姿を消し、いわゆる和泉型瓦質釜などの大型品が出土する。この頃直径12cm位の小さい瓦質釜が出土した。青磁碗は、蓮華紋もしくは飛雲紋（流雲紋）が施されている。

５，15世紀以降


瓦器埦
土師皿・瓦質皿
輸入青白磁
甕
すり鉢
紀州系土師質土器
その他
88年度 6区
SD－3
土器溜り
88年度 6区
SD－1
88年度 1区
SD－1
88年度 1区
SD－2
1200
1250
1300

15世紀以降の遺物の出土は急速に減少する。まとまって遺構から出土する遺物はなく、破片のみである。前時代までよく見られた瓦器椀・瓦器皿が全く見られなくなり、擂鉢も須恵質のものから瓦質のものへと変化する。甕においても同じで須恵質から瓦質のものへと変化するのである。そして中世後期の寺院の特色である香炉・火鉢といった大型の瓦質土器が見られないのが特徴といえよう。　（石松）

〈参考文献〉

大阪府教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅸ」1983～1990
大阪文化財センター　「日置荘遺跡発掘調査報告」1995
貝塚市教育委員会　「王子遺跡発掘調査概要Ⅱ第3次調査」1986
熊取町教育委員会　「熊取町史紀要　第1号　家記・先代考拠略」1985
熊取町教育委員会　「熊取町史紀要　第3号　考古学から熊取地域を考える」1996
熊取町教育委員会　「東円寺跡発掘調査概要報告Ⅰ～Ⅸ」1986～1993
熊取町教育委員会　「熊取町の歴史」1986
中世土器研究会　「概説　中世の土器・陶磁器」1995
中近世土器研究会　「中近世土器の基礎研究」1984

写真図版

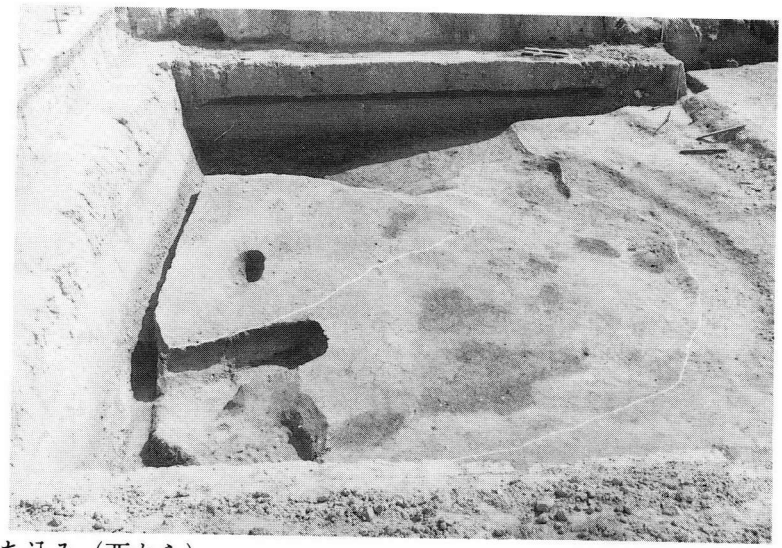
図版 1

東円寺跡97－4区航空測量図

図版2

東円寺跡97－4区全景（南から）

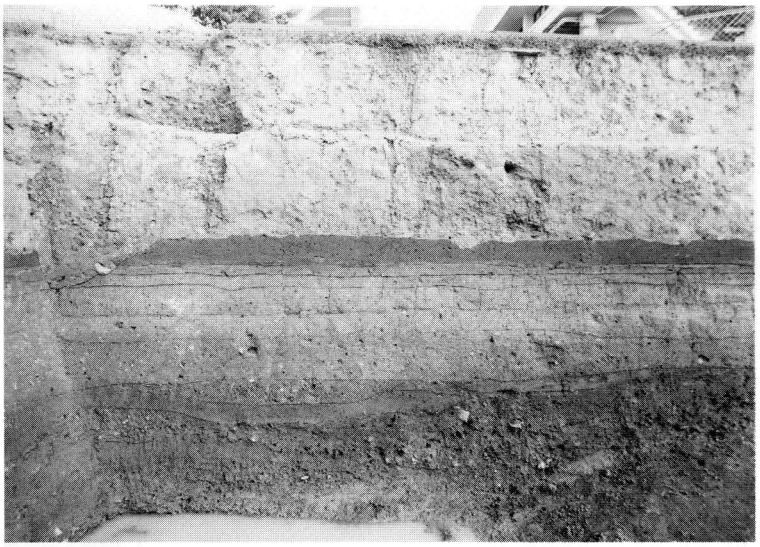
東円寺跡97－4区全景（東から）



東円寺跡97－4区自然河川・落ち込み（西から）

図版3

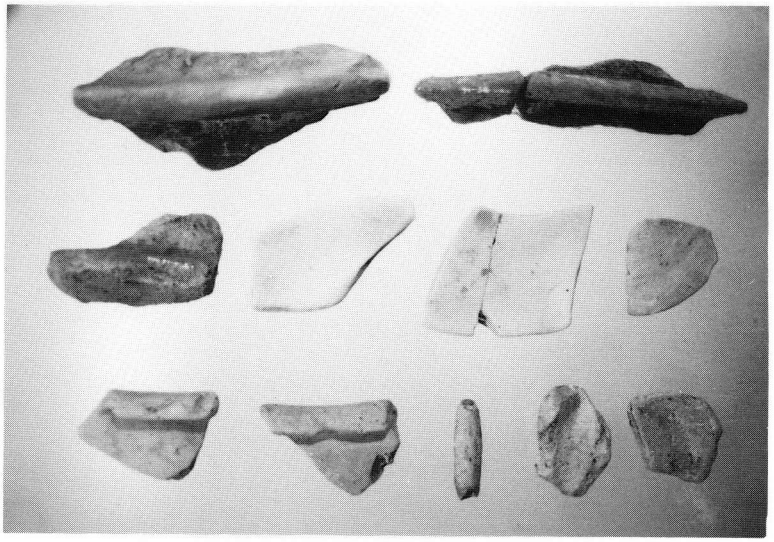
東円寺跡97－4区土層（南から）



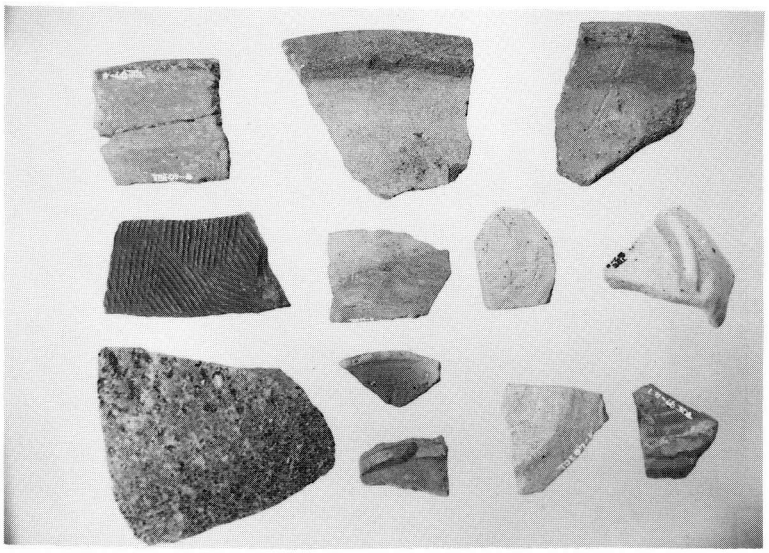
東円寺跡97－4区自然河川（南から）

東円寺跡97－4区自然河川（南から）

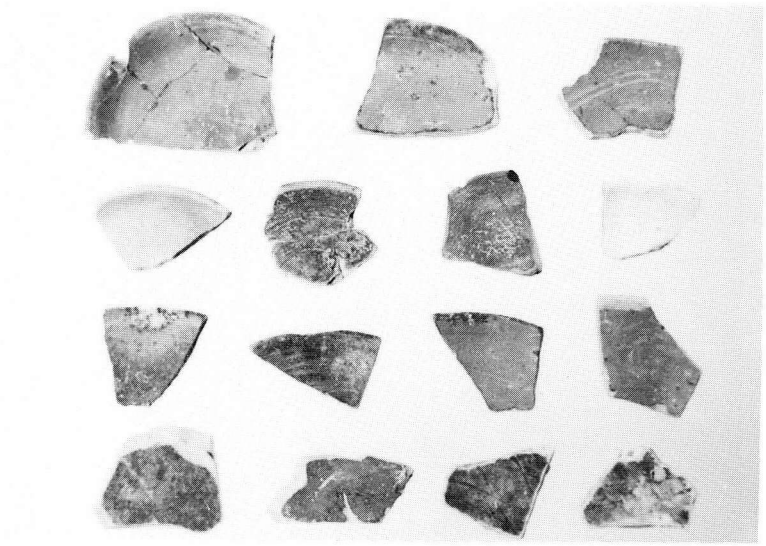
図版4



東円寺跡97－4区遺物
（土師質土器）



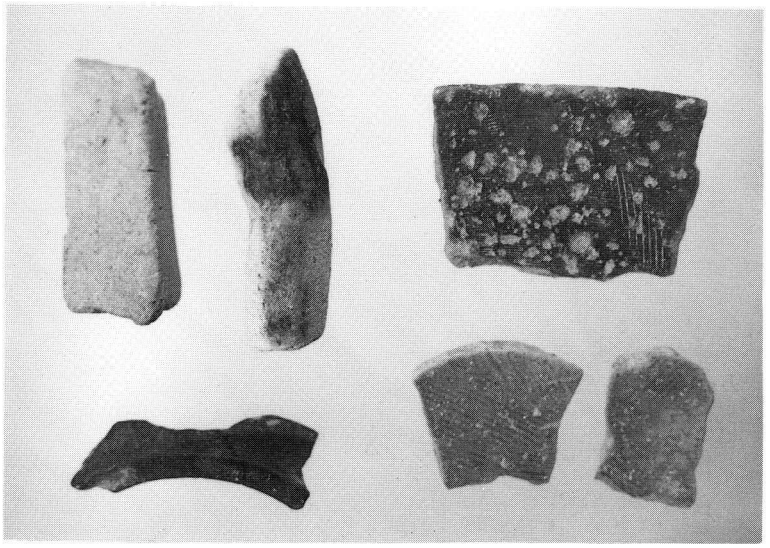
東円寺跡97－4区遺物
（須恵器）



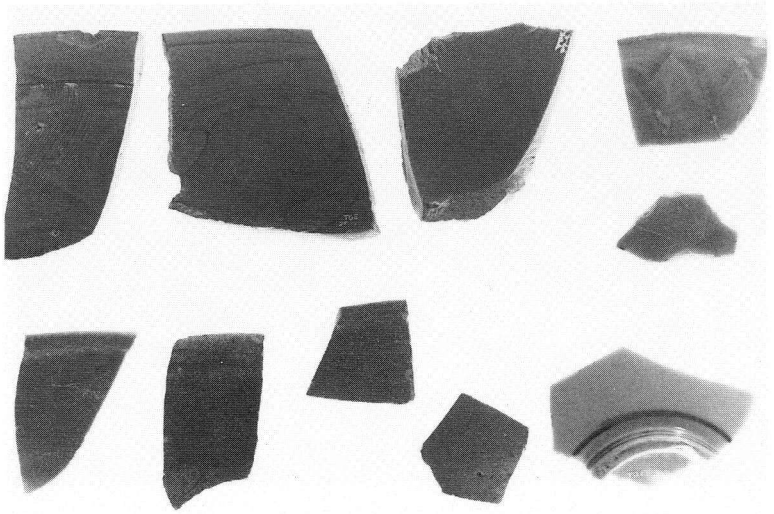
東円寺跡97－4区遺物
（瓦器・瓦質土器）

図版5

東円寺跡97－4区遺物
（瓦器・瓦質土器）

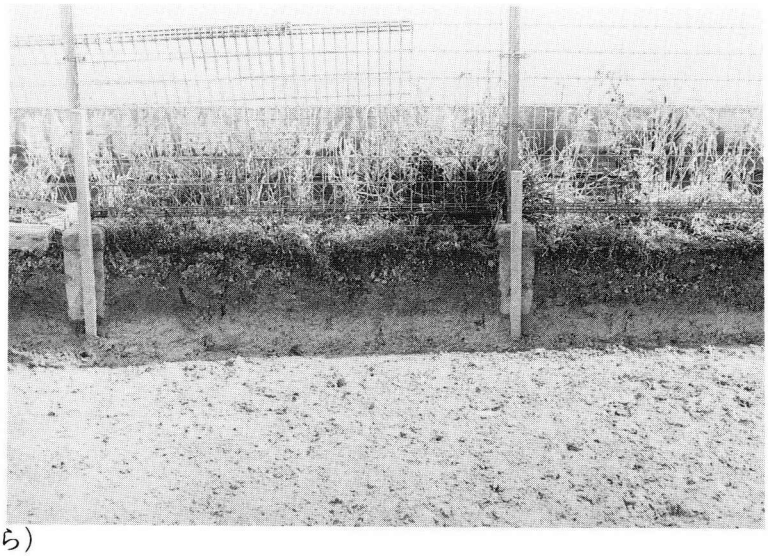


東円寺跡97－4区遺物
（瓦・瓦質土器・石製品）

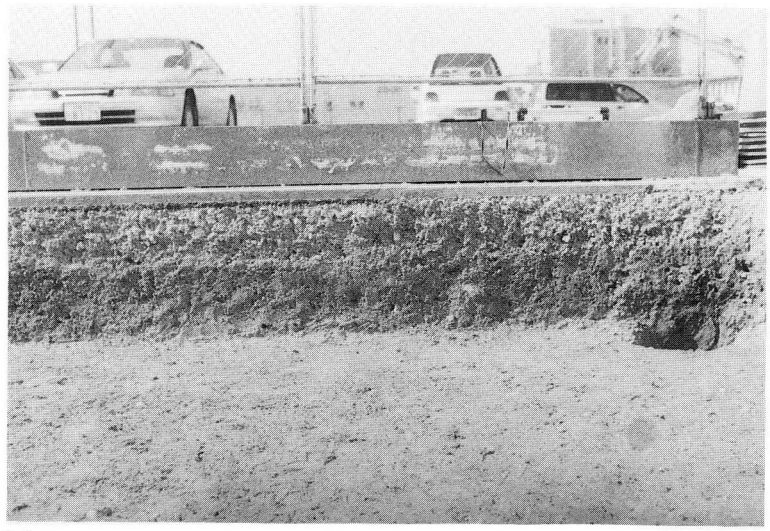


東円寺跡97－4区遺物
（陶磁器）

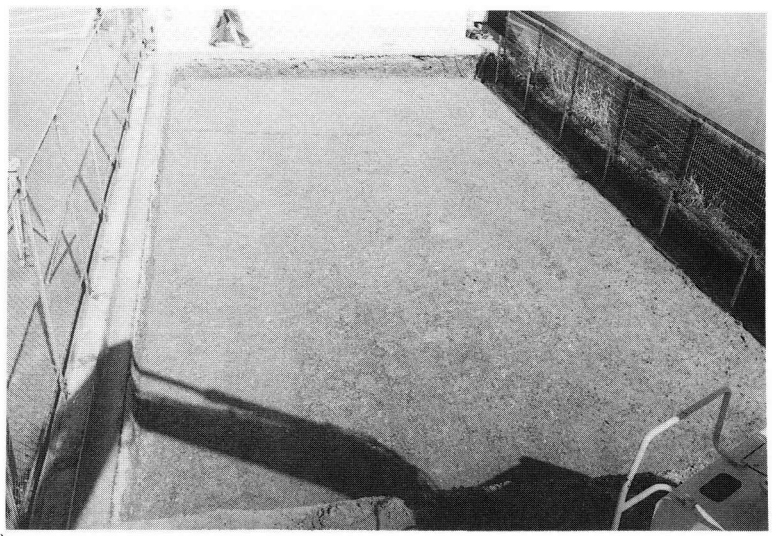
図版6



東円寺跡97－16区断面図（西から）



東円寺跡97－16区断面図（東から）



東円寺跡97－16区全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	とうえんじあとはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	東円寺跡発掘調査概要報告書
副書名	（仮称）総合保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	X
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第31集
編集著名	前川　淳・永井　仁・石松　直
編集機関	熊取町教育委員会
所在地	〒590－0495　大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号　TEL 0724－52－1001
発行年月日	西暦　1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
とうえんじ あと 東円寺跡 97－4区	おおさかふせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうのだ 熊取町野田	27361	6	34° 23′ 46″	135° 21′ 27″	19970901 ～ 19971030	387m²	（仮称）総合保健福祉センター建設に伴う埋蔵文化財事前調査
とうえんじ あと 東円寺跡 97－16区	おおさかふせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうのだ 熊取町野田	27361	6	34° 23′ 47″	135° 21′ 28″	19980219 ～ 19980227	87m²	公用車車庫移設に伴う埋蔵文化財事前調査

所収遺跡	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東円寺跡 97－4区	集落遺跡 寺院遺跡	奈良時代	検出せず	須恵器	奈良時代の坏・壷などの遺物を確認。 平安時代後期から末にかけての同安窯製の青磁碗を確認。 室町時代と考えられる谷状地形を埋め立てた造成地の遺構を確認。
		平安時代	検出せず	土師器・瓦器・須恵器・瓦・陶磁器	
		中世	造成地の跡 落ち込み 倒木痕？	土師器・瓦器・須恵器・瓦・陶磁器	
		近世	水路・耕作痕	陶磁器・瓦	

熊取町埋蔵文化財調査報告第31集

東円寺跡発掘調査概要報告・X

（仮称）総合保健福祉センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

発行日　平成11年3月31日
編集・発行　熊取町教育委員会
大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号
印刷　泉南ムカイ精版印刷(株)